広島大学附属三原学校園研究紀要　第６集　2016　pp. 39-44

保　育

４歳児の人とかかわる力を育むために

―３歳児との交流活動を通して―

森　田　水　加　穂

１　研究の目的

中道（2012）は，「幼児の“人とかかわる力”が，人と直に触れ合い，関わり，感じる中で豊かに育っていくということからすれば，正に育つ機会が減少してきている」[1]と述べ，子どもたちの「人とかかわる力」を育てることが難しい近年の社会を危惧している。そのような中，“人とかかわる力”を育むために，幼稚園における異年齢交流がなされてきた。吉岡ら（2002）のように，５歳児と３歳児の異年齢交流の要点を研究しているもの[2]などがある。しかし，３歳児と４歳児と交流についての研究はほぼされていない。

森上（1986）が述べているように，４歳児は自己主張を繰り返し，友だちと遊ぶことで「ときには自分の欲求を抑えなければならないことを知る，つまり自己抑制できる」[3]ようになってくる成長の時期である。本園の４歳児も自分の思いをしっかりともっているが故に，時として自分の思いを押し通してしまうことがある。そのような経験を大切にしながらも，相手の思いに気づこうとして，自分の気もちを少しずつ調節していけるような“人とかかわる力“をつけてほしい思いが筆者にはあった。４歳児同士では，関係性ができている分，意地を張ってしまったり，自分の思いを押し通してしまったりすることもある。しかし，年度当初から３歳児クラスを気にして振る舞う様子が見られていた。その姿から，年下の３歳児とかかわる中で，相手の様子を見られるようになったり，我慢ができるようになったりするきっかけになるのではないかと感じている。

そこで本研究では，３歳児との交流を通して，４歳児の“人とかかわる力”を育むための教師のかかわり・環境構成を明らかにすることを目的とする。

２　研究の方法

(1) 対象児

年中組４歳児33名（男児18名　女児15名）

(2) 期間・場面

平成27年４月から12月

好きな遊びの時間やまとまった活動の時間において，３歳児と４歳児がかかわり合っている場面。

(3) 方法

４歳児が３歳児とかかわる様子を実践事例に書き起こし，この実践事例を用いて，本園の教師７名で保育カンファレンスを行う。その中で，教師のかかわり・環境構成が適切であったかを検討するとともに，よりよいかかわり・環境構成を明らかにする。

３　実践事例

実践例１　年間を通じてのＡ児の姿を追って

この事例で出てくるＡ児は，手伝いを進んでし，誰かのために働くことが自然にできる子である。一方で，自分の思いをしっかりともっている分，４歳児の友だちに対して，自分の思いが通らないときは手が出てしまうことがある。

＜背景＞

数日前から天気の良い日は園庭で石けんをかき

まぜ，泡をつくって色水の上に浮かべるジュース屋さんを４歳児で楽しんでいた。

①　「明日，ジュース屋さん来てね！」（９月８日）

Ａ児たちは園庭にある花や葉，つくった石けん泡をジュースの上に浮かべ，美味しそうなジュースをつくっていた。一緒につくっていたＢ児が教師にできたジュースを見せに来る。教師は「Ｂちゃーん！すごい！とってもおいしそうだね」と声を掛けるとＢ児は満足そうにしている。様子を見ていたＡ児はＢ児と一緒にジュースを３歳児教師に見せに行くと，驚いたように３歳児教師が「すごい！どうしたん！こんなジュースが売ってるお店屋さんがあったら，絶対買いに行くのにな」と言う。その言葉を聞いたＡ児は「明日ジュース屋するけん！」と３歳児教師に話しかける。嬉しそうにしている３歳児教師に「お金がいるんよ！お金作ってきてね！」と言い，約束をしていた。しばらくそのやりとりを見ていた教師は「Ａちゃん，明日ジュースのお店，するんだって？！」とＡ児に聞くと，満足そうに「うん！」と答える。教師が「楽しみだね」と伝えると，嬉しそうに片付けをし始めたり，近くにいる他の教師にも「明日，もも組（３歳児クラス）にジュース，売るんよ！」と伝えたりしている。

【考察】

Ａ児が３歳児教師に話している様子から，Ａ児は３歳児にジュース屋さんを開く気もちというよりか，３歳児教師に対してジュース屋さんを開きたい気もちが強いのだと考える。３歳児教師がＡ児の“やりたい”気もちになるように認める声掛けをしたり，Ａ児の“やりたい”気もちが膨らむよう教師が共感する声掛けしたりすることで，Ａ児が嬉しそうに他の教師に報告する姿につながったのだと考える。

＜背景＞

前日，４歳児たちは３歳児と手をつないで公園に行き，一緒に遊ぶ活動をしていた。

②　「どうぞ～」（10 月 14 日）

Ａ児はＣ児たちと，前日取ったドングリを見て箱に入れたり，触ったりしていた。教師は「いいねぇ～。ドングリで何して遊んどるん？」と話しかけると，Ａ児は近くに発泡スチロールにさしてあるドングリを見て，「キャンディー売るんよ！」と答える。「キャンディー屋さん？！いいね！またできたら，教えてよ」と嬉しそうに教師が言うと，Ａ児たちは「もも組さんに売るんよ！」と張り切り，友だちと協力してつくり始めた。

しばらくした後，教師が４歳児保育室に戻ると，Ｄ児（３歳児）が４歳児保育室の前でたたずんでいた。様子を察した教師が「あれ？Ｄちゃん，どうしたの？」と笑顔で聞くと，「Ａちゃんがね，ここで待っててって」と少し嬉しそうにＤ児が答えた。しばらくすると，Ａ児が「アイスクリームです～」と言って，カップに大盛りのドングリとスプーンが入っているものを持ってきた。Ａ児はＤ児の顔を覗き込み，Ｄ児に「どうぞ」と言っている。教師は羨ましそうな顔をして「わぁ～！おいしそう。Ｄちゃん，よかったね」とＤ児に伝えると，Ｄ児だけではなくＡ児も嬉しそうな顔をする。

【考察】

Ａ児は前日，Ｄ児と手をつないで公園に行っており，他の３歳児よりもＤ児に親しみをもっていた状態だったため，３歳児に売ろうとしたときに親しみのあるＤ児を誘ってアイスを売ろうとしたのだと考える。Ｄ児自身もＡ児の名前を覚え，嬉しそうに「Ａちゃん」と呼んでいる姿が見られた。教師がＤ児に「よかったね」と羨ましがって声を掛けることで一生懸命つくったＡ児の気もちに寄り添い，認めることに繋がり，Ａ児が喜び，３歳児とかかわる自信に繋がったと考える。

図１　チョコアイス，どうぞ～

＜背景＞

まとまった活動で４歳児が遊び方を教えて３歳児と４歳児が一緒に遊ぶ機会を設けた。４歳児が迎えに行き，３歳児と手をつないで集まってから遊びを始めた。A児が手をつないだE児（３歳児）は，A児と手をつなぐことを嫌がり，園庭を逃げ回った。遊びを終えて，教師が「もも組さんと遊んで楽しかったこと，困ったことがあったら，教えてね」と言い，個別に感想を聞いていた。

③　「困ったんよ」（11月６日）

A児のところに行き，教師は「Aちゃん，どうだった？」と聞くと，いつもの表情と違い，少し放心状態で「困ったんよ」とA児が答える。「困ったの？何に困ったんかなあ」とやさしい調子で教師が尋ねると，「Eちゃんがね，逃げるけ，困ったんよ」とA児がぽつりと答える。教師は「そっか。困ったんよねえ。Aちゃんはその時どうしたん？」と聞くと，A児は「Eちゃんを追いかけたんよ。でも止まってくれんかったんよ…。T先生（３歳児副担任教師）が“もういいよ。先生が呼んでくるからAちゃんあっちで待ってて”って言ってくれたんよ」と答える。教師は「なるほど，そうなんだ…。大変だったね。でも，Aちゃん，Eちゃんのために何とかしようと思ったんよね」と笑顔でA児を労うと，少しほっとした様子で静かにA児は頷いた。

【考察】

３歳児副担任教師がA児に「もういいよ」と言うまであきらめず，A児は逃げるE児を追いかけるという自分なりの方法でE児とかかわった。遊びが終わってからも，心から困っていたからこそ，教師に伝えたのだと考える。普段の４歳児とのかかわりの中では，A児がそのように素直に困ったことを伝えることは少なく，自分の思い通りにならないと手が出たり，自分の思いを伝えることをあきらめたりしていた。年下の３歳児だからこそ，少し自分の気もちを抑えてどうにかしようと思って行動していたのではないかと考える。

実践例２　色水・石けん遊びを通して

＜背景＞

C児たちは５月下旬から色水・石けん泡遊びを好み，毎日のように遊んでいた。毎日遊ぶ中で，どの花だと濃い色水ができるか，どうしたら堅い石けんの泡をつくることができるのか等，少しずつコツをつかんでいた。

その日は，休日前に石けんをかき混ぜてつくっておいた泡がとても堅くなった状態になっていた。

①　「持ってあげようか？」（９月14日）

「ね！触ってみて！すっごい堅くなっとるんよ！」とC児が教師に言う。その声を聞き，カップの泡を教師が触ってみると，泡が少し堅くなった状態になっていた。「え，これすごいじゃん！どうやったん？」と教師が言うと，C児は「お休みの間にこうなったんよ」と自信満々の表情で答える。C児は近くにやってきた３歳児教師にも同じことを報告している。３歳児教師のそばにいる３歳児たちはC児が見せる堅くなった泡をじっと見つめており，感動している様子である。

３歳児教師が「こんな素敵なものもつくれるの？！お姉ちゃんたちすごいねえ」と言っていると，C児たちはG児（３歳児）に「教えてあげる！」と胸を張って言いながら，３歳児保育室前の色水・石けんコーナーに向かう。「これがいるんよ。ボールにはお水を入れてくるんよ」と言って，泡をつくるのに必要なものを指さす。その後，C児はすぐに４歳児保育室前の色水・石けんコーナーに戻っていく。G児は水を入れてから，４歳児た

ちのあとについていこうとするが，重たくてなかなか運べない。教師がG児に向かって「重たいねえ…」と声を掛けると，教師の声を聞いたC児が「持ってあげようかあー？」と言って，４歳児保育室前の色水・石けんコーナーに持っていく。その後，C児はG児の横に立ち，作り方を教えて，G児が泡をつくっているところを横から見守っている。

【考察】

C児たちが「教えてあげる！」と自信満々に言っているのは，C児たちがそれまで長い間色水・石けん遊びを毎日のように繰り返し遊んで，どうしたら堅い泡をつくることができるかを知っているからこそ，教えようという気もちになったのではないかと考える。

また，教師や３歳児教師がC児たちのつくった石けん泡を見て，心から驚き喜びを伝えるかかわりをしたことでC児たちの自信に繋がっていったのだと考える。だからこそ，途中からG児の困っている様子に気づかないでいた様子だったが，教師がG児に意識を向けることができるような声掛けをすると，C児は困ったG児の様子に気づき，その後もG児の横に立って教えている姿が見られたのだと考える。

図２　やってあげるね

＜背景＞

数日前から遊び始めたカラーセロハンを使った色水をジュースとして売り，３歳児を４歳児のおまつりに呼ぼうということになった。

②　「色水をつくりたい！」（12月４日）

C児たちは登園後さっと支度をして，ジュース屋さんの場として決めた木のおうちに向かっていく。C児たちが黄色の色水と赤色の色水を少しずつ足していくと，色水がオレンジ色に変わった。色水は太陽の光を受けてきらきらと光るように輝いている。それまで見たことのない色に変化していく様子を見て，C児たちは「わあ…」と言っている。C児たち４歳児は気もちが高ぶっている様子で，４歳児同士で「すごい！」「これはどう？」などと話し合いながら，いろいろな色水を足したり，加えたりして色の変化を楽しんでいる。

そこへＩ児（３歳児）がやってきた。おまつりと聞いていたからなのか，空き箱でつくったカバンをかけ，お金のようなものを握っている。様子を見て近づいてくるが，４歳児は誰もＩ児の様子に気づかない。Ｉ児が困り果てている様子だったため，教師が「Ｉちゃん，おはよう。どうしたの？」と聞く。Ｉ児は「ほしいの…」と言って，４歳児のつくっているジュースを興味深そうに見ている。教師は４歳児にも聞こえるように少し大きな声で「わあ！Ｉちゃん！これもつくってきたの？これ，なあに？」と聞く。Ｉ児は「お金」と答えたため，教師は「え！お金つくってきたんじゃ～」と言いながら，４歳児の様子を伺う。教師の声に一瞬C児が顔を上げるが，すぐまた色水をつくり始める。

【考察】

色水でジュースをつくり，そのジュースを３歳児に売ろうと話し合ったものの，色水を足したり，加えたりする中で生まれる色の変化にC児たちは感動している様子であった。いわばC児たちは色水遊びに没頭して，いろいろな方法を試して遊んでいる状態だった。そのため，近くにＩ児が来ても声を掛けたり，ジュースを売ろうとしなかったりしたのだろうと考える。

今回，３歳児とかかわるようなかかわりを教師は行ったが，まずはC児の色水遊びへの興味を大切にすることが大事だったのだと考える。C児たちが色水遊びを十分に楽しめる時間や，いろいろな方法で試したりできる環境を確保すると良かっ

たのではないか。

実践例３　ふれあい遊びを通して

＜背景＞

３歳児と４歳児が互いに親しみがもてるようにと，ふれあい遊びとしてフープ取りゲーム（椅子すわりゲームの椅子をフラフープに変えたもの）を行うことにした。４歳児たちは３歳児たちが遊び方を知らないことを知ると，「（お手本として，やって）見せてあげる！」と言い，見本を見せて教えてから一緒に遊ぶことにした。３歳児と遊ぶ前に，１度４歳児だけでも遊んでおり，その際にはK児がフープに入ろうとしなかったり，入ったフープから出て遊んだりする姿が見られた。

「自分たちで遊びたいんよ！」（11月６日）

３歳児に見本を一通り見せた後，３歳児と４歳児で遊ぶことにした。歌を歌いながら，フープの周りを歩いていく。歌が止まった瞬間，近くのフープに入っていく。普段３歳児とかかわるところを見たことがないＪ児は袖を噛んだ状態で教師を見つめていた。不安そうな表情を浮かべていたK児は，教師の「もも組さん連れてこんにゃ！」という声に反応して，焦った表情で手をつないだ３歳児を引っ張ってフープに入っていった。

【考察】

意欲をもって３歳児に遊びを教えようとしたものの，“もも組さんの前ではちゃんとしなくちゃ”という思いからか，４歳児だけで遊んだ時よりも不安そうな表情でいるK児の姿が見られた。また，あまり３歳児とかかわることに興味をもっていないと思われるＪ児が袖を噛んで遊んでいる様子が見られた。保育者の３歳児とかかわらせたいという意図が強すぎたり，一人ひとりのペースや興味にあったかかわり合いができないような活動をまとまった活動として展開したりしたことで，K児たちが負担に感じ，なかなか普段の自分が出せない状態だったのだと考える。自分のペースで遊べる場所・時間を確保し，３歳児や４歳児なりに興味がある遊びをしていく中でかかわり合えるようにすることが大切だと考える。

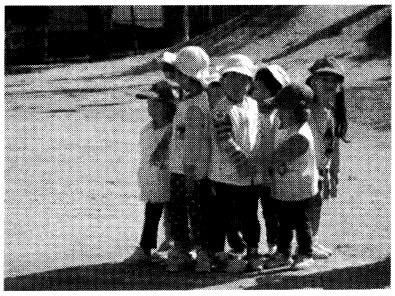

図３　こっちに入るんだよ

４　実践を終えて

年間での実践を積み重ねる中で，３歳児との交流を通して，４歳児の“人とかかわる力”を育てるための環境・援助について，次の点が大切だと考える。

(1) 子どもの思いを受け止める教師のかかわり

実践例１の事例①では，教師が無理に３歳児とかかわるようにせず，その思いを受け止め喜ぶことで，A児の嬉しい気もちが膨らんでいったのだと考える。

このように，子どもたち一人ひとりには“～したい”という気もちがあり，それが教師の“～してほしい”思いと相反してしまうときもある。まずは，その時その時に子どもたちの“～したい”気もちをありのままに受け止めることで，子どもたちの意欲に繋がっていくのだと考える。

(2) 興味のある遊びを自分のペースで十分に遊べる時間や場所を確保する環境構成

実践例２の①では，興味のある色水遊びを遊びこんでいる状態だからこそ，C児が３歳児の様子を見ながらかかわる姿が見られた。逆に実践例２の③では，遊びこんでいない状態だったため，３歳児にかかわろうとしないC児の姿が見られた。また，実践３では，一斉に遊ぶ場で４歳児が３歳児とかかわるよう教師がかかわったため，普段の

自分が出せないK児の姿が見られたりした。

まずは，子どもたちが自分のペースで遊べるだけの時間や場所を確保し，子どもたちが興味のある遊びに対して自信をもてるようにすることが大切であると考える。

(3) 自信に繋がっていくような教師のかかわり

実践例１の②や実践例２の①で，３歳児を羨ましがる声掛けをしたり，子どもたちがつくったものを素直に認めたりしていくことで，自信に満ち溢れ喜ぶ姿や胸を張るようにして３歳児とかかわっていく姿が見られた。

このように，４歳児が４歳児なりに３歳児とかかわっている姿や粘り強く遊び続けている姿を認めることで，４歳児の自信に繋がっていくのだと考える。自信をもつことで，３歳児の情況に気づき，自分なりにかかわってみよう，遊びを教えてあげようとする意欲が育っていくのだと考える。

(4) 自分なりにかかわったことを認めていく教師のかかわり

実践例１の③で，思わぬ行動をした３歳児に対して自分なりにかかわった姿を労い，認めていくことで,素直に自分の思いを伝える姿が見られた。

このように，自分の気もちを調節しながら，３歳児の様子を見て，自分なりに考えながらかかわっていく姿をしっかり認めていくことが大事であると考える。困ったことや頑張ったことに対して，教師が思いを寄せ，心から共感することで，子どもたち自身の気もちが晴れたり，満たされたりするのだと感じた。４歳児の自分なりのかかわりをしっかり認めた上で，３歳児の思いに気づけるようなかかわりをすることで，４歳児の３歳児とかかわろうとする意欲や態度がより育っていくのではないだろうか。

研究を進める中で，年度当初には見られない，３歳児の様子を見て自分なりに動こうとする４歳児の姿が見られるようになった。今回挙げた事例のほかにも，３歳児が困っているときに何とかしようとする４歳児の姿が見られたり，３歳児と４歳児が誘い合って園庭で遊ぶ姿が見られたりしている。

ただし，今回事例であげたA児のように，３歳児とかかわることでの“人とかかわる力”が育ってきたと感じる子どもたちはクラスの約３分の１程度である。クラスの約半数以上の子どもたちがあまり３歳児を気にしていないような姿も見られている。４歳児の，同年齢で遊ぶ楽しさや子どもたちの興味・関心もしっかり考慮した上で，３歳児とかかわることで育つ“人とかかわる力”をどう育んでいくかを今後も研究していきたい。

＜引用文献・参考文献＞

1) 中道美鶴：「幼児の「人とかかわる力」を育む視点から，幼児の言動の理解と援助についての一考察」環太平洋大学研究紀要(6), pp. 55-61, 2012.

2) 吉岡晶子, 桝田正子, 伊集院理子, 上坂元絵里, 高橋陽子, 佐藤寛子, 清宮聡子, 渡邉満美：「幼稚園での異年齢交流」日本保育学会大会発表論文集(55), pp. 232-233, 2002.

3) 森上史朗［編著］：「４歳児の世界　育児と保育のために」pp. 89-91，1986，世界文化社.